

栗本 薰

# 天狼星

II



栗本 薰

工业学院图书馆  
藏书章

# 天狼星

II

講談社

## 天狼星II

昭和六十二年十一月十六日 第一刷発行

著 者——栗本 薫

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号——一一二一

電 話——東京(〇三)九四五—一一一(大代表)

印刷所——株式会社廣濟堂

製本所——藤沢製本株式会社

定 価——一〇〇〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

© Kaoru Kurimoto 1987 Printed in Japan

天狼星Ⅱ——目次

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	プロローグ
珊底羅	頰爾羅	安底羅	迷企羅	伐折羅	宮毘羅	
さんちら	あじら	あんちら	めきら	ばさら	くびら	
146	120	93	64	35	10	7

第七章	因陀羅 <small>いんだら</small>	175
第八章	波夷羅 <small>はいら</small>	203
第九章	摩虎羅 <small>まこら</small>	231
第十章	真達羅 <small>しんだら</small>	260
第十一章	招杜羅 <small>しやとら</small>	288
第十二章	毘羯羅 <small>びから</small>	315

イラストレーション／天野喜孝  
ブックデザイン／安彦勝博

天狼星 II





## プロローグ

一九八×年は、うららかに明けた。

というか、少くとも、人びとの目には、そのように見えたのであった。恒例こうれいの、年末、年始のさまざまな行事、某国営放送の歌合戦だとか、何とか大賞、初詣はつもとも、初日の出も、順番どおりつつがなくおこなわれた。天候もよく、あたたかな、まことにのどかでおだやかな新年であった。ひかれるおみくじは、ことごとく「吉」や「大吉」であったし、あまり景気も直したわけでもなかったが、このところのさかんな懐古ブームに乗って、町にはことのほか、和服姿の女性が多く、それが、車の少なくなった正月の町に、いっそうゆったりとした正月気分をかもし出していった。

そう思ってみるせいなのかもしれないが、正月早々の新聞の紙面も、例年に比べて何となく波乱が少ないようであった。毎年、必ず出る、もちをのどにつまらせて死ぬ老人も、今年は二、三件しかなかった。「正月早々焼け出され」だの、「一家惨殺ざんさつ」だのという記事も、見られなかった。正月一日の新聞の、社会面のトップは、「初詣に夜どおし三万人」で、三日のトップ記事は、「東西に文化のかけ橋」という、篤志家とくしかの尽力によってパリでの舞踊公演が実現の見とお

し、という、まことにのどかなものであった。

ここ数年來、じっさいの景氣のよしあしや、事件や、社会の動向とは必ずしも関係なく、人心はとかく荒みがちであった、ということとは、多くの識者の認めるところであった。むしろ、事件はおおむね同じように起っているのであるが、それをうけとめる人々の心が荒れ、動揺しやすくなっているからこそ、ことさらに凶變のあかしとなりそうなことどもばかりをひろいあつめ、より出して、記憶にとどめ、口の端にのぼせたのである、と云うことも、できたかもしれない。

じっさい、世の中というものは、つねに多事多端ではある。——大地震、飛行機事故、列車事故、大金の強奪、火山の噴火、異常氣象、殺人、放火、いじめ、通り魔、自殺、狂言強盜、自動車事故、ひったくり、ストライキ、デモ、リンチ、ネズミ講。世に、新聞記事の種ばかりは、決して尽きることがない。

その上に、それをいっそう色あざやかにいろどるかのような、あの流言蜚語というやつがある。毎年毎年、飽きもせずにくりかえされる、今年こそ東京大地震説、富士山大噴火説、うんぬん、かんぬん。

それだけをきいておれば、この世の中なにも何十回滅亡したかわからぬくらいなのだが、今年もやっぱり、地震は三月だそうだ、いや十一月だ、グランド・クロスだ、ファティマの大予言だ、と人々が不安そうにささやきあっている、ということ、そのものが、去年も同じようになりかえされたあやしいそのささやきが、結局のところすかしつ屁同様、何の実体もちはしなかつたことの、一番はつきりとした証拠というものであった。といって、一回でもそれが的中してしまえば、それつきり二度とそういううわきは流れなかつたであろう——ともかく、流す方も流される方もいなくなってしまうのだから——から、むしろ、うわさが性懲りもなくどこかから流れてきてははびこる、ということとは、平和のひとつの象徴で、嘉すべきでさえあつたのかもしれない。

ぬ。

もし、そんなふうには、ひねくれた考え方をするものがいたとしたら、だからむしろ、この新年のうららかなさは瑞祥ずいしょうとはいえない、不吉である、などと理屈のひとつもこねたかもしれぬ。この数年来、ずっと人心は何がなしわさわさとおちつかず、世紀末とグラッド・クロスと双方の一年ごとに近づき来るあやしい波動に心さわいでやまぬかのようにとかく頹廢たいはい、とかく狂気の沙汰さたへと向かいがちであった。それが、中休みのようにばかりと迎えたこのしずけこそ、むしろ逆に、人々の不安が表面的なものでなくなり、しっかりと心中深く根づいてしまったあかしである——と。

とまれ、まだ、一年ははじまったばかりであった。

じっさいには、年があらたまる所といったところで、今日が昨日のつづきであることにはいささかのかわりもなく、年がかわっても、大宇宙の黄金律にも、たいていの人々の心のしがらみや思いにも、急にどんでん返しがあるわけでもありはしないのだが、それでもとりあえずは、年が明けた、というだけで、血塗られ、汚れ、くたびれた世界がすべて新しく無垢むくに生まれかわったかのように思われるのは不思議というほかはない。が、そんなわけで、世界は、うらかな、つかの間の平和と安息を久々にゆつたりと味わっているかのようであった。

そして、それが、たちまちのうちにまたあやしい夜闇の世界へと変容をとげてゆくのも、これまたいつものことであったのだ。

# 第一章 宮毘羅くびら

## 1

と、いうわけで――

風もなく、うららかな、おだやかで天候のよい新年であった。

最近では、正月の三ガ日だけが、大東京の空から汚れた排気ガスと車の騒音が消え、くっきりと青い空としんとしずかな町並と、すいすいと走るいつもよりは少ない車、という、本来あるべき姿をとりもどす時になっている。道路では、けたたましい排気音やクラクションのかわりに、子どもたちの遊ぶ声がきこえてくる。雀の、チュンチュンと鳴きかわす声もきこえる。ふくらんだ白梅の香りさえしてくるようだ。娘たちは、晴着をまとい、気取って、つんとあごをあげたり、すそを気にしながら歩いている。エスコートする男の子たちでさえ、日ごろよりひと回り大人になったかのようだ。

そんなことをぼんやりと思いつながらちびり、ちびりと昼間から酒をすすっているこの家の主はいえ、すっきり深い椅子に体が沈んでしまつて、机の上にぬっとつき出た、二つの足しかみえない。その両足が、紺くろの、サイズ二十六の足袋たびにつつまれていることからして、たぶん上は和服である。その組んだ足の両側に、一体全体どういふつもりであるのか、小さな、二十センチく

らしい門松がおいてあるのは、何とも珍妙な眺めであった。まるで、骨ばった細い足首さえなければ、紺色の、奇妙な形の鏡餅かがもちみたいに見えるたかもしれない。

しかし足の主の方からは、いっこうにそれが珍とも妙とも感じられぬらしく、しばらくそうやっていたと思ったら、そのうちこんどはぐーッ、ぐーッ、という何ともどかな音が、椅子の方からきこえてきはじめた。つまりは足の持主は、ぐっすり寝入ってしまったのである。

まことにもって天下太平というか、極楽とんぼというべきこの情景は、そのまま放っておけば何時間でもつづきそうであった。電話も鳴らないし、生首の入った箱をかかえた郵便配達がベルを鳴らしもしない。少しづつ、うららかな空がかけりはじめ、カーテンをあけつ放しの窓の彼方に、たそがれの淡い色あいがおりに来はじめ。

が、幸か不幸か、このままにしておいたら、風邪をひくことうけあいの、この平和なうたたねは、一時間かそこいらしかつづかなかった。

そんなにガタンピシャンガツシャーン、というすさまじきでこそなかったが、ノックもベルも何もなしに、やにわにドアがひきあけられ、そして、呆れはてたような大声が、平和な静けさを一気に破ったからである。

「あら、まあ」

どうにも、あいそがつきはてた、というような大声であった。

「なんてこと。——どうせ寝正月だろうと思つて来てみれば、寝正月は寝正月でもデスクでうたたねとはね！ ちよつと、起きなさいよ、大介さん！ そんな恰好かっこうでねていると、カゼをひくわよ。それより、苦しくはないの？ ちよつとつてば！」

むろんのこと、伊集院大介が、仰天きょうてんしてとび起きたのはいうまでもなかった。

たしかに、あまり、ほめられた恰好とは云えなかつたかもしれぬ。めがねは顔の横にずりおち

て、そのつるでほつぺたに赤いあとがついていたし、せつかく着こんだ一張羅の紺の大島のお  
対も裾ははだけ、衿はゆるみ、にゅつとやせたすねがつき出して、その上、無精ヒゲが色白の顔  
をむさくるしくいろどつていようというありさまである。このところ、伊集院大介は床屋に行つ  
ていなかったたので、蓬々とのびた髪の毛がけつこうな長さになって、まるきり、明治の貧乏書  
生、という恰好であった。

「や、や、や。いつのまにか、すっかりよく寝ちゃった。あつ、カオル君——あれ、いつ来た  
の？ あれつ、もうこんな時間！」

半分椅子からずりおちたかっこうになつた大介は、すっかりうろたえて立ちあがり、めがねを  
細い鼻柱の上にずりあげ、ずつこけた着物を何とか直そうとじたばたしはじめた。しかしまだ半  
分寝ぼけていたので、かえつて逆の方向にひっぱつてしまい、鮮かに「洛中洛外図」を染出し  
た長襦袢がすっかり出てしまった。

「あれつ、武彦君も一緒だったんですか。あ、明けましておめでとうございます。ともかく、あ  
の、いま一寸この着物を何とか——ええい、もう、ダメだ。さいしょから、やり直した。すみま  
せん、ちよつと、むこうを向いてもらえませんか」

「いまさら、向こうを向いてどうしようっていうの」

森カオル——いまは松之原カオルは、呆れはてたように笑いなから云つた。

「それに一体、何なの、その物凄い長じばん。——狂気の沙汰だわね」

「いいだろう」

伊集院大介は自慢した。

「そうざらにはない柄なんだぜ」

「ざらにあつてたまるもんですか」

「またそういう——大体あなたは風流とか、江戸趣味とか、粹いつてもものを解さないからなあ」

大介はなおも着物と格闘していたが、やっと気づいて羽織をぬぎ、帯をほどいた。そして襦袢の前をあわせ直すと、けっこう馴なれたしぐさですばやく着物を着、兵児帯へこおを結び、羽織を着直した。松之原カオルはしようがないと云いたげにソファにすわっていたが、結婚ほやほやの夫の松之原武彦は、面白そうにそのようすをずっと眺めていた。

「さあ、これでできた、と」

伊集院大介はほっとして、

「やあ、とんだところを見られちゃって。武彦君、カオルさん、それでは改めて、新年おめでとうございます」

「おめでとうございます」

りゅうとした三つ揃ぞろいの武彦は年賀の包みをさし出しながら、

「どうも、本当に、何から何までお世話になりました——いやあ、本当に、伊集院先生がおられなかつたら、いまのぼくらはまったくありえなかつたですよ」

「とんでもない。もう、昔のことですよ。——お母さまは、お変わりありませんか」

「おかげさまで、やっぱあさまの死のショックから立ち直ったようですよ」

「偉大なおばあ様でしたものね。——ああ、カオル君、いや、松之原夫人、お綺麗きれいですよ。よく似合う」

「あら」

松之原カオルは、ちょっと照れて、ひわ色の小紋の袖そでで頬をおさえた。髪をアップにして、黒っぽい帯をしめたところは、決して夫より七つも年上の女流作家のようには見えなかつた。

「いや、やっぱり、お正月は和服ですねえ」



伊集院大介はコーヒーをいれようとうごきまわりながら、

「もちろん、それは、えーと、ご自分——」

「で、着るわけないでしょ。美容院に決ってるじゃないの、意地悪」

「しかし女らしく見えるから不思議——あ、もう、こういうにくまれ口は、旦那様の前じゃ、云っちゃいけないんだった」

「いやいや」

若いわりに落着き払った松之原武彦は、ニヤニヤ笑いながら、

「しかし先生はまた実に板についてますね。それに今、拝見してましたら、着方もとても馴れてらして、何かやってらしたんですか」

「とんでもない。ただ、昔から、好きで、よく着てたもんでね。しかし、本当は、ぼくのようなやせすぎだと、もう一つサマにならないです。帯が、三巻きしても余ってしようがないんで。本当は武彦君なんか、きぞよくお似合でしょう」

「どうせ、うちの人はデブよ」

「ちょっと、カオル君」

「いや、いつももう、こてんぱんに云われてますから——ただ、僕はどうもいかんですね。地方のああいふ家の出で、誰も、かれもが和服でしょう。かえって、反発して、ハイカラ党になりましたね。年をとると、わかりませんがね」

大介のいれたコーヒーのかぐわしい匂いが、事務所中に立ちこめた。大介は夕暮が近いのに気づいて、あかりをつけた。

「これでも、一応掃除したんだけどね」

いくぶんおもはゆそうに云う。